

主 題：信仰の成長を目指して7：希望における成長3

聖書箇所：ピリピ人への手紙 3章10－12節

私たち信仰者にとってすばらしい模範であるパウロ、彼がどのように歩んだのか、彼の信仰の歩みの秘訣は何だったのかを彼は私たちに教えてくれています。私たちはそのことを学び続けているのですが、今日もピリピ人への手紙3章10節からごいっしょにみことばを見ていきましょう。

☆希望をもって歩んでいくために

I. 歩みの動機

神に喜ばれる歩みを為していくために、主の前に価値のある信仰生活を送るために必要なことは、どのような動機をもって歩むかであり、神の関心は私たちの動機であるとパウロから教えられました。

A. 救いの喜び 7－8 a 節

パウロは救われた喜びをもって歩んでいました。罪が赦されたその喜びをもって、そして、その喜びが彼の信仰生活の原動力であったことを見ました。

B. 救いの希望 8 b－9 節

また、彼は救いの希望をもっていました。主にお会いすることを待ち望みながら歩んでいました。そのことは今日も見ます。

これがパウロ自身の信仰者としての動機であったと教えられました。

II. 実際の歩み 10－12 節

その上で彼は、彼自身がどのように生きたのか、その実際的な具体的な歩みについて私たちに教えてくれています。

A. 主の力によって生きる 10 a 節

私たちが主に喜ばれる歩みを為していくためには、主の力に依らなければならないとパウロは教えます。私たちはともすれば自分の力、自分の知恵でしなければならないと思ってしまうからです。だから、失敗するのは、主が備えてくださる力によって働きを為さないとパウロは私たちに教えます。パウロが望んだことは、10節に記されていますが、日々の生活においてもっと愛する主イエス・キリストを知ることでした。復習になりますが、私たちもパウロと同じ願いをもって歩んでいるはずですが、もし、歩んでいないなら今からそのように歩み始めることです。私たちの主をもっと知りたい、それは知識を蓄えることではなくて、経験を通して、主を個人的に知っていくことです。私たちは主がどのような方かを聖書を通して教えられています。「主は約束を守られるお方だ」と知っていますが、でも、それを本当に実感するためには、私たちが主の言われたことを実践することによって、確かに主はこのように約束を守られた、主はこのように約束されたことを実現されたと確信を強めていくことによるのです。皆さん、もし、私たちの信仰が成長して来ないとするなら、その原因はみことばをただ聞くだけでいつまで経っても実践しないからです。

パウロの生き方を見ると、彼は救われたことを喜んでいたし、すばらしい希望が与えられていることを覚えて生きていましたが、彼はそれらをただ心に秘めていたわけではありません。それが彼の日々の生活に形となって現われていました。今日のみことばを見ても私たちが教えられることは、パウロは確実に神のみこころを知り、みこころに従って生きていこうと、そのように歩んでいたということです。だから、神は彼を祝されし、彼を用いられたし、もちろん、彼の信仰は成長しました。

ですから、私たちが覚えなければならないことは、みことばを聞いているだけになっていないかどうか、それを実践しているのかどうかということです。みことばが教えていることは、私たちがみことばを実践するために必要なすべての力は主によってもう与えられているということです。イエス・キリストの復活の力があなたに備えられていると。なぜなら、みことばを行なっていくために、主に喜ばれる歩みを為していくためにそれが必要だからです。永遠に価値ある生き方をしていくために、あなたには十分な力が備えられている。イエス・キリストがその死からよみがえって来たその力が実はあなたに備えられているとパウロは言うのです。ですから、私たちが神に喜ばれる歩みをしていくためには、この主の力をいただきながら日々生きていくことが必要です。

B. 主を信頼して生きる 10 b－11 節

二つ目にパウロが教えることは、前回少し見ましたが、どんなときにも主に信頼を置いて生きることです。そのことを今日もこの10－11節から見ていきます。

1. キリストの苦しみにあずかる

パウロはこのように言いました。１０b節「またキリストの苦しみにあずかることも知って、」と。この苦しみとはクリスチャンが受ける迫害のことであると前回見ました。主に喜んで従っていく生活にあっていろいろな迫害が伴う。彼自身が実際に様々な迫害を経験していたのですが、しかし、パウロはそのことを喜んだのです。パウロは「神がすべてのことを働かせて益とする」とローマ書で教えました。「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益とくださることを、私たちは知っています。」（ローマ８：２８）。あなたの益であり、そして、神の栄光が現わされる機会であると教えました。ですから、彼が告白することは、私たちが人間的に見て益とは思えない迫害でさえも、実は、益であるということです。迫害を通して主のみわざが成されたパウロは何度も私たちに教えています。そのことをパウロは学び、私たちも学ぶ必要があります。

皆さんもよくご存じのように、神はすべてのことをご自身のご計画に従って為してくださっています。私たちが覚えなければならないことは、私たちが忠実に主に従い続けていくことにおいて、いろいろな問題、いろいろな困難、いろいろな苦しみ悲しみが出て来るけれど、すべてのことは私たちの信仰が成長していくために必要だから与えられているということです。ペテロもこのように言っています。ペテロの手紙第一４：１２－１３「愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、：13むしろ、キリストの苦しみにあずかるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現れるときにも、喜びおどる者となるためです。」と。彼は二つのことを言っています。①すべてのことは主の御手のうちにあるのだから、心配しないで主を信頼しなさいと。②もう一つは、あなたがそのように主に信頼し続けていくな、その歩みに対する主の報いがあるということです。

ですから、もしこの中で、希望が見えない大変な苦しい状態にあって辛い思いをしておられる方がいるなら、神が私たちに示してくださることは「信頼しなさい」です。先日、メンフィスを訪問したときこのようなことがありました。土曜日に学びが始まったのですが、この姉妹は３時間以上かけてご自分で車を運転して集会に来られました。７０歳を越えたご婦人でした。土曜日は一日学びをして姉妹はとても喜んでおられ、翌日の日曜日も早く起きて早く学びに行きたいと思っていたところ、階段で転んで足を骨折されました。その電話をもらったときに皆が思ったことは、折角来たのに、学びを楽しみに遠いところから来たのにどうしてなのでしょう？でした。その晩に手術が行われました。手術を受けられたこの姉妹はその後でこのように話してくれました。実は、骨折によって彼女の息子さん家族がお見舞いに来ましたが、翌日、仕事と学校のために息子さんと子どもたちは帰り、残ったのは義理の娘さんでした。この二人の間は余りうまくいっていなかったのですが、神は二人だけの時間を与えられたのです。彼女は言います。「こうして骨折で入院をしていなかったなら、一番大切な関係を修復することができなかった。だから、ハレルヤ！」と。

私たちはそのようなことを何度も経験しています。なぜ？と思うことがあっても、その背後にすばらしい神の知恵がありご計画があると、そのような神なのです。だから、パウロは「どんなときもあなたは主に信頼を置きなさい」と言います。この方は神であると言います。ですから、皆さんに一つアドバイスしたいことがあります。それはあなたが忠実に主に従い続けている中であって、様々な問題や苦しみ悲しみを経験するとき、そのことを主に感謝することです。私たちにとって一番難しいことです。私たちは「問題が解決したら感謝する」と言いませんか？でも、私たちは主を信頼する者としてその問題を感謝するのです。なぜなら、その背後に神の完全な計画があるからです。そうして私たちは日々の生活を通して主に信頼を置いて生きることがどんなにすばらしいことであるか、同時に、信頼を置いている神がどんなにすばらしい方であるかを学んでいくのです。そのようにして信仰は成長していくのです。パウロはそのようにして来ました。ですから、彼はどんな迫害を経験しようと、その迫害を喜び、その中であって神に従い通していったのです。主への強い信頼があったのです。

２．キリストの死と同じ状態になる １０c節

１０節の最後に「キリストの死と同じ状態になり、」と記されています。「同じ状態」とは「同じ形にする、同じ形を取らせる」という意味をもったことばです。パウロがここで言わんとしたことは「私は主のためにだけ生きる」です。そのことを宣言しているのです。パウロはこの箇所だけでなく、すべてのところで「私はすべてのことを主のために行ないたい」とそのように願って、そのように生きていたことは皆さんもよくご存じです。主が罪人である自分のためにいのちを捨ててくださったように、今度は自分自身が主の前にすべてを捨てて、すべての点で主に喜ばれたいと願って生きていこうとしたのです。パウロは主イエス・キリストを模範にして生きました。イエスは私たちのために喜んでご自分のいのちを捨ててくださった。イエスは父なる神のみこころに従い私たちのためにいのちを捨てて救いを備えてくださいました。パウロも同じことをしようとするのです。

パウロは「私がこの世にこうして生きているのは、主のために生きるためであり、そして、主に喜ん

でいただくことを行ない続けるためである。」と、まさに、「私にとっては、生きることはキリスト、死ぬことも益です。」（ピリピ1：21）と言った通りです。私の関心はただ一つ、主を喜ばせることだけだと言うのです。イエスは私を覚えてくださり、私のような罪人を愛してくださり、私のような罪人のためにご自分のいのちを犠牲にしてくださった。私もこの主のためにすべてを捨ててこの方に従い続け、この方が喜んでくださることだけを行なっていきたいと、パウロ自身、そのことを改めてここで告白しているのです。信仰者の皆さん、それが私たちの生き方です。私たち主によって救われた者たちは、彼と同じように生きていくことを、神ご自身が望んでいることを知っています。

パウロがそのことを教えている箇所があります。もうすでに学んだところですが、ローマ6：10－11「なぜなら、キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、キリストが生きておられるのは、神に対して生きておられるのだからです。：11 このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい。」。パウロはこの箇所で二つのことを教えています。一つは、クリスチャンの定義を与え、もう一つは、クリスチャンとして生きていくための秘訣です。

◎クリスチャンとはどういう者たちか？

（1）罪に対して死んだ者

つまり、神に逆らい続け自分中心に生きて来た救われる前のかつての自分は死んだということです。その自我が死んだのです。

（2）神に対しては生きた者

イエスとともによみがえった、新しく生まれ変わったということです。神に逆らい続けることしかできなかった者が神に従って、神を喜ばせることができる者へと生まれ変わったのです。神のみこころに逆らい続ける者がみこころに従うことができる者へと変えられたのです。神の栄光を汚すことしかできなかった者が、栄光を現わすことができる者へと生まれ変わった。サタンに仕えて来た者が主なる神に仕える者へと生まれ変わったのです。

これがクリスチャンだと言います。生まれ変わったのですからその生き方が変わるのは当然のことです。その定義を与えたパウロは、どのようにすればその新しい歩みを実現できるのか、そのカギを与えています。6：11の最後に「思いなさい。」とあります。これが新しい歩みを為していくためのカギだとパウロは言うのです。これは「それに心を留めなさい、それをいつも実行しなさい、考え続けていなさい」ということです。新しい歩みを為していくために必要なことは「考えること」、これは現在形ですから「考え続けていくこと」です。つまり、私は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者であることを、いつも考え続けること、そのことを忘れないということです。これが新しく生まれ変わった者として正しい歩みを為していくための秘訣であると言うのです。

パウロは間違いなく、日々主に似た者に変えられて、主を喜ばせていきたいということを願い、そのように生きていました。ですからパウロは、神に喜ばれる生き方をしていくためには常にみこころを求めそれに従って歩んでいかなければいけないということを知っていました。

そして、イエス・キリストを信じ神によって救われた皆さんのうちにも同じ願いがあるはずで、主のみこころに従っていききたい、神に喜ばれることをしていきたいと…。でも、現実には私たちの心を見るなら、そのような歩みを何とか阻止しようとする働きも私たちのうちにあります。神のみこころに従っていくことを邪魔する思いがあります。神に喜ばれないことをやりなさいと勧める思いがあります。それは「罪」です。私たちが救われる前に行っていた生き方は自分中心であり、自分の好きな生き方でした。神のことなど考えもしませんでした。そのような誤った生き方に気付いて私たちはそのような生き方を捨てて、主が喜ばれる生き方をしようと変えられました。ですから、確かに、私たちの心の中には神が喜ばれることをしていきたいという思いをもっています。けれども、注意していなければ、その思いを妨げる思いや考えが私たちの内側から出て来ます。かつての自我が私たちのうちで頭をもたげて来ます。そのことは皆さんも経験されているはずで、

そこでパウロは「キリストの死と同じ状態になり、」と言うのです。パウロはこの自我が私が歩むべき道を歩まないようにと邪魔をしますと言います。だから、この自我を死んだ状態にしようと言うのです。自我が頭をもたげないように、自我が邪魔しないようにと…。だから、パウロはここで「死」ということばを使うのです。いつも思わなければいけません。かつての自分は死んだのだ、自我に従って自分の思うままに生き、神に背いて生きて来た自分は死んだのだと。そして、私は新しい目的をもって生きる者へと生まれ変わったと言います。ですから、パウロはそのような者へ変えられたことを覚えて、そのように生き続けていこうとしていたのです。最初に言ったように、パウロは主に喜ばれることをどれ程したいと願っていたのか、そして、それを邪魔するものが何かをよく知っていたのです。自我です。彼はそれを捨て続けようとしたのです。自分の考えでなく神のみこころに従っていこう、自分を喜ばせる

のではなく、神を喜ばせるにはどうすればいいのかを考えてそれを選択していこう、自分の思いに従って生きるのではなく主のみこころに従って生きていこうと、パウロはそうのように生きていたのです。確かに、それは大変な戦いであることは私たちも分かっています。この罪との戦いは栄光のからだをいただくときまで続くからです。そして、その戦いは大変だということも私たちは知っています。だから、パウロはよみがえったキリストの力があなたのうちに働いていると、そのように教えたのだと思いませんか？今、私たちが見ていること、パウロが生きたように私たちも生きることが可能なのです。パウロがすばらしかったと言っているのではありません。パウロのうちに与えられた神の力がすばらしく、その力によって生きるときに、神のみこころに沿って生きることができるのです。勘違いしないでください。私たちは栄光のからだをいただくときまで、罪との葛藤があるし、罪に敗北を帰し続けていきます。ですから、罪を犯したときに私たちが神の前にそれを告白することも、実は、みこころに沿った生き方なのです。神はそのことをご存じであり、それゆえに私たちにそのように教えてくださったのです。

ですから、迫害を経験したパウロはその背後にすばらしい神のご計画があると神を信頼して、どんなときでも主を信頼して従い続けていったのです。そして、その歩みを邪魔するのが罪だということを知っていたから、彼は常に「私は死んだのだ。そして、新しい私がよみがえったのだ。」ということを考え続けながら、そのことを自分にしっかり思い起こさせ続けながら生きていたと、パウロはそうのように私たちに告白しているのです。

3. 死者の中からの復活に達したい 11 節

パウロは「キリストの苦しみにあずかること」、「キリストの死と同じ状態になること」、そして、11 節では「**どうかして、死者の中からの復活に達したいのです。**」と言っています。確かに、パウロはこの「復活」を待望していたということを見て取ることができます。皆さんに少し説明しておきたいことがあります。実は、日本語では非常に上手に翻訳されていますが、11 節のみことばの原文には「もし」という接続詞がついているのです。ですから、ある人たちは「もし」がついているということは、パウロ自身が復活に関して何か疑問を持っていたのではないかと言います。でも、「もし」ということばがついたのは復活が実際に起こるのかどうかということを疑問視していたという意味ではないのです。実は、パウロは復活に関してある疑問があったのです。それはパウロは自分自身が死んでしまった人たちの中からよみがえるのか、それとも、生き残っている人たちの中から死を経験することなくよみがえるのか、それが分からなかったのです。

パウロの疑問は、自分が死を経験した後よみがえるのか、今、生きている間によみがえるのか、そのどちらかが分からないということです。それは私たちも同じではないですか？なぜなら、私たちは明日のことが分からないからです。イエス・キリストが帰って来られたときに、私たちは主のもとに上がるのですが、私が死を経験してから主のもとに上がるのか、生きたまま主のもとに上がるのかは分かりません。パウロはそのことをここで表現したに過ぎないのです。復活を疑問視していたのではないのです。自分がどのような状態から復活するのか、そのことが分からないと言ったのです。

1) 復活

11 節でパウロが「**死者の中からの復活に達したい**」と言いましたが、これは恐らく「再臨」のことです。なぜ、そのように言えるのでしょうか？二つの理由があります。

(1) このよみがえりは、死人の中から一部の人たちだけがよみがえるもの

「復活」ということばを見ると、実は、このことばは新約聖書の中でここにしか出て来ないことばですが、その意味は「他の死体、死人の中から一部の者がよみがえる」です。たくさん死んでいる者たちの中である一部の人がよみがえるということを表わしたことばなのです。ですから、このことばは全員がよみがえるというよみがえりではなくて、死んでいる人々の一部の人がよみがえるということで、パウロはここでそのことを言わんとしたのです。このことばを見るとそのことが分かります。

(2) 信者の復活を強調している

もう一つは、パウロはここで非常に面白いことばの使い方をしています。それは11 節にある「**死者の中からの復活**」ということばです。この短いフレーズの中に、実は、あるギリシャ語を2回使っているのです。それは「エク」というギリシャ語です。これは「ある場所の中から外へ出ていく、ある所から外に出る」という意味を持ったことばです。一回目は「**死者の中から**」の「**から**」がそうです。死んでいる人々の中から出て来るということです。もう一つは「**復活**」ということばです。これも「～から外に出る」という意味の「エク」ということばと「**立たせる**」ということばの二つが合成してできています。ですから、何かから出させて立たせる、死人の中からその人を出してその人を立たせる、つまり、「よみがえり」、「復活」という意味を持ったことばを使っているのです。

ギリシャ語の権威であった A・T・ロバートソンという新約の解釈学の教授は「パウロは「エク」を二度用いている。彼はこの言い回しで一般のよみがえりを否定していない。しかし、信者のよみがえり

を強調しているのである。」と言います。まとめると、パウロはこの11節で明らかに「再臨」のこと、さらに言えば「空中再臨」のことを言っているのです。なぜなら、クリスチャンたちが待望しているのはそれだからです。使徒の働き26：7に「私たちの十二部族は、夜も昼も熱心に神に仕えながら、その約束のものを得たいと望んでおります。王よ。私は、この希望のためにユダヤ人から訴えられているのです。」とある通りです。パウロは復活と再臨のときを待望していたのです。

先に進んでいくために次の説明をしておきたいと思います。「復活」と言うと二つの復活があることをご存じでしょう。「第一の復活」と「最後の復活」です。ここにいるすべての人々、世界中のすべての人々はどちらかのときに復活します。復活しない人はいないのです。「第一の復活」で復活するか、「最後の復活」で復活するかのどちらかです。例外はありません。

◎復活

(1) 第一の復活

・**新約の聖徒たち** — 主イエス・キリストを信じている新約時代の人々がよみがえるときのことです。それはイエス・キリストの空中再臨の時に起こります。皆さん良くご存じのように、今、私たちは聖書を学び、そして、今の社会情勢を見たときにそのときが非常に近いことに気付きます。イエスが言われた「世の終わりはこのようになっていく」というその兆候を今見ているからです。その世の終わりが来る前に起こることが約束されている空中再臨、そのときに新約の時代、教会の時代、ペンテコステ以降、イエスを信じた者たちがすべて一挙にキリストの元に引き上げられるのです。これも第一の復活の一つです。

・**旧約の聖徒たち** — 旧約の聖徒たちがよみがえるときがやって来ます。教会時代の前、ペンテコステの前のことです。ダビデやモーセなど、神を信じていた旧約の聖徒たちがよみがえるときです。主イエス・キリストがこの地上に帰って来られ、千年王国を築く前に彼らのよみがえりがあります。これも第一の復活と呼ばれています。

ですから、お気づきのように、第一の復活はある一瞬の出来事を言っているのではありません。空中再臨に始まって、そして、地上再臨、その7年間のすべての時間を指しているのです。イエスが空中でクリスチャンを迎えに来られたときによみがえるそのよみがえり。そして、今度は主イエス・キリストが地上に帰って来られるときによみがえるそのよみがえり、このすべてを第一の復活と呼んだのです。この第一の復活に与るのは、新約の時代のクリスチャンたちであり、また、旧約の時代の聖徒たちです。そして、もう一つあります。

・**患難時代に救いに与った聖徒たち** — キリストの地上再臨のとき、千年王国の前です。空中再臨が起こってから地上にはいろいろな患難がやって来ます。7年間の患難の時代に、イエスを信じる人たちがイエスが地上に帰って来られた時によみがえります。

ですから、第一の復活にはこのような人々が含まれるのです。少なくともそのことを考えると、この第一の復活に与る者たちは「幸いな者」です。罪の赦しを頂いている者たちです。神によって救いを頂いている者たちです。この人たちには永遠のさばきはないのです。永遠の地獄はないのです。

(2) 最後の復活

この最後の復活は、すべての時代にあって罪が赦されるのにその赦しを拒んだすべての人々が含まれます。神が罪を赦してくださる、そして、救い主を送ってくださり救いを備えてくださったにも関わらず、その救いを自らの意志で否定し拒んだ者たちです。主が備えてくださった救いを否定するならば、それを拒むなら、残っていることは、自分で自分の罪のさばきを受けないといけないということです。私たちはみな知っています。私たちの心の中に罪があることを。自分の中に汚れた思いがあること、そして、さらに言うなら、私たちは神がいることを知っていながら、その神がだれであるかを求めようとしません。自分に都合のよい神々を信じて来たり、信じ続けていこうとしています。そうして神の前に、創造主なる真の神に対して罪を犯しているのです。もし、イエスを信じておられない方がいるなら、この警告はあなたに対するものです。あなたのすべての罪をご存じである神はあなたに警告を与えています。必ず、あなたの罪がさばかれると。

私たちが望むことは、あなたがこの最後の復活によみがえらされるようなことがないことです。そんなことがないことを私たちは期待します。どうぞ、第一の復活に与る者になってください。主の赦しを受け入れて主が備えてくださった罪の赦しをご自分のものとされることを心から願うものです。

パウロは、こうして主イエス・キリストにお会いしたいということをここで改めて繰り返しました。パウロはイエス・キリストにお会いする日が近いということを知っていました。自分が死を経験してからなのか、それとも生きている間なのか、それは分からないけれども、必ず、イエスにお会いすると。その時までパウロは主に対して忠実に従って行きたいと願いました。主が備えてくださった十分な力を頂きながら、彼は大変な苦しみにある時も主を信頼し、そして、そのような主に対する忠実な歩みを妨

げる罪を除きながら、「私は新しく生まれ変わったのだ」ということをしっかりと覚えて、その歩みを神の助けをもらいながら継続していったのです。彼はもう暫くすると主イエス・キリストにお会いする、だから、その時までしっかりと走り続けていこうとその願いを持って歩んでいたことはこのみことばが明らかにしています。11節の最後に「達したいのです」と記しています。主イエスにお会いするそのことを彼自身がどれ程強く願望していたのかを見て取ることができます。

C. 完全を目指して生きる 12節

パウロはこのようにして生きたと言います。そして、12節のみことばは私たちにもう一つの大切なことを教えています。実際の歩みにおいて、主の力によって生きること、主に信頼を置いて生きること、そして、12節で「完全を目指して生きること」をパウロは教えるのです。12節「私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようとして、追求しているのです。」、ここに「すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。」とあります。この「完全」とは信仰において大人となることです。信仰において成長を遂げるということです。信仰において大人の人とは、主のみこころが何であるかをしっかりと見極めて、そのみこころに従って行く人です。反対に、幼い人とは主のみこころより自分の考えに沿って生きようとする人です。パウロは主のみこころに従って信仰においてもっと成長し大人になっていきたいとそのことを願っていました。ですから、「走るべきコースを走り終えたのではない。まだ、ゴールに到達していない。」と言うのです。

パウロがこのピリピ人への手紙を記したときは、彼が信仰を得てから約30年経っていました。信仰者として約30年生きていたのです。想像がつかますでしょう？彼がどれ程大人だったのか、どれ程素晴らしい信仰者であったのか…。主に対する愛においても、そして、罪を憎むその思いにおいても…。でも、そのパウロが言うのです。「私は未だすべての点で完全になったのではない。この罪のからだ、この古い性質が残っている。しかし、私は将来、近い将来、この罪のからだから解放されて栄光のからだを頂くことを知っている。その日が早く来て欲しい。栄光のからだを頂くなら主を悲しませること、主の前に罪を犯すことから完全に解放されるから。」と。ですから、パウロはその時までしっかりと走り続けようとしたのです。

繰り返します。なぜ繰り返すのか？実は、パウロがそのことを繰り返しているからです。12節の終わりに「そして、それを得るようにとキリスト・イエスが私を捕えてくださったのです。」とあります。つまり、パウロは「私はイエスにお会いする日を待ち望みながら、より信仰において成長し、神が喜ばれることを継続していきたい。でも、それが実現可能なのは神が私を捕えてくれたからだ。」と言います。彼のこのことばを見ると、彼は繰り返しながら私たちに教えてくれるのです。信仰において成長していくために必要なのは「神の力」だ。あなたが神に喜ばれる者として成長していくために必要なのは「神の力」だと。神が働いてくださらなければ、私たちは自分の意志や自分の力では到底その目標に到達することはあり得ない。でも、神が私を捕えてくださったから、このことが可能なのだと言うのです。クリスチャンの皆さん、「アーメン！」と言いませんか？神はこんなことをしてくださっているのです。神はあなたを捕まえてくださった。あなたはもうこの神のものなのです。その神があなたに力を与え、そして、この世にあってこの神のすばらしさを証するためあなたを使ってくれるのです。だから、パウロが言うように「主に喜ばれることを継続していきたい。そして、それは、主の助けがなければ不可能だし、そして、そのことを実践するための助けはもう十分私に備えられている。」です。

こうして見ると、だれも「出来ません！」とは言えないでしょう？キリストの復活の力が与えられているし、神があなたを捕えてくださった。神があなたを捕えた以上、神が成し遂げてくださるのです。神があなたを変え続けておられるのです。ですから、私たちがその神に自らを委ねて「主よ、どうぞ、そのように歩ませてください。」とあなたが願い、そして、主の力を頂きながら日々みことばに従って行くなれば、神はあなたを変えていつてくれるのです。パウロがそうであったように…。

信仰者の皆さん、私たちは変えられていきます。あなたは変えられていきます。その希望はパウロだけのものではありません。私たちのものなのです。でも、そのためには私たちはどのようにして生きていけばよいのかを知らなければいけません。神の力に頼ることです。自我が芽生えて、そして、その自我があなたを惑わすことがないように、常に主のみこころを求めながらそれに従い続けて行くことです。パウロはそのことを願い、また、ペテロもこのように言っています。Ⅱペテロ3：18「私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの恵みと知識において成長しなさい。このキリストに、栄光が、今も永遠の日に至るまでもありますように。アーメン。」と。ペテロはクリスチャンたちが成長するようにと願いました。なぜ最後に「このキリストに、栄光が、今も永遠の日に至るまでもありますように。」と言ったのでしょうか？ペテロも成長させてくださるのは神だということを知っていたのです。だから、神を誉め称えたのです。

簡単にしか見ることができませんが、13節「兄弟たちよ。私は、自分はすでに捕らえたなどと考えるべきではありません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、」

と、パウロがここで言ったことを簡単に言うと、彼は神のみこころに従って歩んで行くための妨げとなるもの、かつて、自分がそういうものを愛して、そういうものに従って生きて来た、それらすべてのものを意識的に意図的に拒むということです。パウロが「前のものに向かって歩んで行く」と言うのは、私たちのうちにかつての生き方に引き戻していこうとする罪の力がいつも働くからです。ですから、パウロはそのようなものをすべて拒んで、そして、私は前に向かって歩んで行く、キリストが私を完全に変わてくださるその日を待望しながら、主に従い続けていくと言うのです。すごい信仰者の証を見たのです。パウロの信仰者としての歩みの真髄を私たちは見たのです。繰り返しますが、あなたもこのように生きることができるのです。思いませんか？そのようにして生きなければせっかく与えられているこの日々、人生を無駄にするではないですか？私たちはかつての自分は死んだのです。新しく生まれ変わったのです。主の栄光を現わす者として生まれ変わったのです。それなら、そのように生きることです。そして、そのように生きることができるとパウロは教えてくれるのです。そして、彼の歩みがその証拠です。彼はそのように生きたのです。そして、私たちに言うのです。「あなたも同じことができる。私の模範に倣ってついて来なさい。」と。

主に似た者に変えられたいという願いを持って生きたのはパウロだけではありません。トーマス・チショームという一人の信仰者も同じでした。彼は非常に貧しい家庭に生まれたので高校にも行けなかったのですが、16歳になると彼は自分の通っていた小学校で教員として働くようになったのです。学校には行けなかったけれどもそのような働きに就きました。そして、27歳のとき彼はイエス・キリストを信じるのです。彼の名前は皆さん余りご存じでないかもしれませんが、彼が書いた曲は良くご存じです。その中の一つが「主のまことは奇しきかな」という有名な曲です。讃美歌第Ⅱ篇191番、また、新聖歌20番にもその曲は出ています。

彼もパウロと同じように、主のようになりたい、イエスに似た者と変えられることを望みました。ですから、「主に似た者に変えられること」という曲を書きました。歌詞は「あなたのようにになりたい 聖なる贖い主 これが私の変わらぬ願いであり祈りです 私は喜んでこの世のあらゆる宝を捨てます。イエスさま あなたの完全な御姿を着るために あなたのようにになりたい あなたのようにになりたい。聖なる贖い主、あなたのように聖くありたい。あなたの優しさが入るように、あなたが満たしてください。あなたご自身の御姿を私の心の奥底に刻み込んでください。」と、まさに、パウロが望んだように彼も生きようと思いました。主よ、私はもっとあなたに似た者に変えられてきたいと。パウロはどうすればそのように生きていくことができるのかを教えてくれたのです。

是非、このみことばを實踐してください。パウロが歩んだように、私たちもその歩みに倣って生きていくことです。その時に、主は私たちを変えてくださり、イエスに似た者に変え続けてくださり、そして、主のみこころが私たちを通して為されます。なぜなら、あなたが主のみこころを行なっているからです。そうして生きることです。新しくされた者として生きることです。

《考えましょう》

1. 「再臨を待ち望んでいる人」は、その生き方に特徴があります。その特徴を挙げてください。
2. 再臨を待望しながら生きることが、どうして大切なのでしょうか？
3. パウロが主に願った「完全にされる」とは、どういうことですか？
4. どうして「完全にされること」を願いながら生きることが重要なのでしょうか？